

「弟子として気をつけること」(Challenge of Being Disciples) セッション5

ルカ 22 章 31-34 節を始めに

1A サタンによる振り

1B 人中心の思い マタイ 16 章 20-23 節

2B 復活を経ない神の国

3B 弟子:神と人への服従

2A イエス否定へと発展する罫

1B 見せつける行為 (Performance) マタイ 17 章 1-5 節

2B 自分の地位の確保 マタイ 18 章 1-4 節

3B 自分の努力 マタイ 18 章 21-22 節

4B 恵みから離れた報酬 マタイ 19 章 27-30 節

5B 競争 マタイ 20 章 20-21 節

6B 律法主義的な態度 マタイ 26 章 6-13 節

7B 自信 マタイ 26 章 31-35 節

3A イエス様の執り成し

本文

31 シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。32 しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちをカづけてやりなさい。」33 シモンはイエスに言った。「主よ。ごいっしょになら、牢であろうと、死であろうと、覚悟はできております。」34 しかし、イエスは言われた。「ペテロ。あなたに言いますが、きょう鶏が鳴くまでに、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」

私たちは、弟子として生きることについて見てきました。これから、イエス様が最後の最後に、ご自身をもっとも親しくされた十二弟子に対して語っておられます。多くの弟子が離れていってしまっても、「主よ。私たちがだれのところに行きましょう。あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます。(ヨハネ 6:68)」と言ってやまなかつた弟子たちです。その彼らに、最大の試練がやって来ます。捕らえられていくイエス様につまずいて、散り散りになる羊の群れのようになってしまいます(マタイ 26:31)。

1A サタンによる振り

イエス様がペテロに対して、彼が麦のようにふるいにかけるサタンの願いがあったことを伝えておられます。シモンは否定しますが、その数時間後に、見事にイエス様を三度、知らないと言って

しまいました。なぜこんなことが起こったのか？このサタンによる振り、というのはどうことかを見てみたいと思います。ここのイエス様の言葉に至るまでのいきさつを、辿っていききたいと思います。

1B 人中心の思い マタイ 16 章 20-23 節

マタイ 16 章 20-23 節を開いてください。「そのとき、イエスは、ご自分がキリストであることをだれにも言ってはならない、と弟子たちを戒められた。その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。するとペテロは、イエスを引き寄せて、いさめ始めた。「主よ。神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに起こるはずはありません。」しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

これは、ピリポ・カイザリヤにおいて、弟子たちに、「あなたがたは、わたしを誰だと思えますか？」と尋ねられて、ペテロが、「生ける神の御子キリストです」と答えた後のことです。その中で、イエス様が、ご自身が十字架に付けられることを語られました。するとどうでしょうか、ペテロはイエス様を自分のところに引き寄せたのです。そして、そんなことあってはならないと諫めます。そして、イエス様、何と言われましたか？「下がれ。サタン。」です、ここからサタンによるふるい分けが始まっていました。

そしてサタンがなぜペテロの思いに働きかけることができたのか？イエス様は、「あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」ということです。人間中心の考え方が弟子として命取りでありました。人の思いや考え方を優先させると、それがいかに良いものに見えようとも、サタンの道を歩むことになるのです。

2B 復活を経ない神の国

どうしてペテロは、「そんなことが、あなたに起こるはずはありません。」と思ったのでしょうか？イエス様が十字架に付けられることを語られたからです。弟子たちは、イエス様がエルサレムに向かうということであれば、そこに神の国を立てられるということだろうと思っていました。ローマの力を打ち砕き、そこでユダヤ人の王として君臨されると思っていました。そして、ユダヤ人の宗教指導者にも認められると思っていました。ところが、イエス様は殺されると言われたのです。ローマの力を打ち砕くのではなく、反対に、ローマの主権に服従することを意味していた十字架に付けられるのです。それで、「そんなことが、あなたに起こるはずはありません。」と言ったのです。

ここにおいて弟子たちが聞き損じていたのは、「三日目によみがえらなければならない」とのことです。その甦りがあって、それで初めて神の国が立てられます。言い換えれば、私たちは自分で神の国を立てるのではない、ということです。主ご自身も、人として、ご自分の力で神の国を立てる

ことを拒まれたのです。もっぱら父なる神に従順になって、ご自身を捨てられました。そして、神がご自身を死者の中から甦らせることによって、神の支配が始まりました。ですから、自分の力で神の国を建てるのではありません。自分を生かすのではなく、死なないといけないのです。そこに神の国が広がるのであり、復活なしの神の国は、偽物です。神中心の国ではなく、神の名を借りた人間中心の国、自分中心の国になってしまいます。

3B 弟子: 神と人への服従

そこでイエス様はすぐに、「マタイ 16:24 だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」と言われました。イエス様についていくとは、自分のあり方や考え方を捨てる生活です。そして、ローマの十字架を背負うということですが、これはキリストのゆえに人にも従うということです。神を恐れるからこそ、人の制度に従います。そして、その中で証しを立てます。妻であれば夫に、子であれば親に、奴隷であれば主人に仕えます。自分自身が従うことによって、かえってキリストが自分に現れてくださり、キリストの生きた証しを立てることができるのです。

2A イエス否定へと発展する罠

しかし、弟子たちはそのことを悟ることができませんでした。そのために、十字架の日が近づくにつれて、どんどん自分の肉の弱さに引き込まれてしまいます。

1B 見せつける行為 (Performance) マタイ 17 章 1-5 節

イエス様は、ご自身の神の国を栄光の姿に変えられることによって、弟子たちに見せられました。マタイ 17 章 1-5 節に書かれています。ペテロとヤコブとヨハネを連れて、高い山に上られました。顔は太陽のようになり、衣は光のように白くなったとあります。それから、モーセとエリヤが現れたのです。その時にペテロは何をしたのでしょうか？ 口出ししましたね。「17:4 もし、およろしければ、私が、ここに三つの幕屋を造ります。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。」彼は、神の栄光にあずかったら、何か自分がしなければいけないと感じていました。それで、余計なことを行なったのです。このような栄光をイエス様が弟子たちにお見せになったのは、天からの声、「彼の言うことを聞きなさい。」であります。ただイエス様の言われることをすればよいのに、何か自分がしなければいけないと思って、神の前にも、人々の前にも目立つ行為を行ないました。

私たちは、教会においていろいろなことが起こっているのを目にして、「自分は何かをしなければいけない」という圧迫、プレッシャーを受けます。全て、主が行なわれていることなのに、自分が目立ったことをしないとといけないと思ってしまうのです。

2B 自分の地位の確保 マタイ 18 章 1-4 節

そして、彼らはイエス様がエルサレムに近づいているので、ますます御国が近くなっていると思

い込んで、「だれが一番偉くなるのか？」ということが関心事になっていきました。マタイ 18 章 1-4 節にその話があります。イエス様は何をなされたのでしょうか？そうです、小さな子どもを呼び寄せて、こう言われたのです。「18:3-4 あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません。だから、この子どものように、自分を低くする者が、天の御国で一番偉い人です。」

自分が権威の下にあることをよく知っているのが、子供です。子供は、親の言われることを信じて、従わなければいけないものだと思っています。それと同じように、神の言われることを、権威ある言葉として従うことが、イエス様がここで言われている「自分を低くする者」であります。弟子としてイエス様に従っているのに、醜いことを話しています。「誰が主導権を握るか？」です。主の働きが行なわれて、それにただ従って来ただけなのに、誰が中心人物になるのか？という話は、まさに弟子たちがここで行なってしまった過ちです。私たちが集中すべきは、誰がどうしているのか？ということではなく、イエス様が言われていることに集中します。

3B 自分の努力 マタイ 18 章 21-22 節

他にも、ペテロがイエス様の心とずれて言っている姿を見ます。同じ 18 章で、イエス様が、兄弟が罪を犯した時は、独りで責めなさい、それでも悔い改めなければ二人、三人を連れて来なさいという話をされました。その時にペテロが、「主よ。兄弟が私に対して罪を犯したばあい、何度まで赦すべきでしょうか。七度まででしょうか。(21 節)」と尋ねます。自分がどこまで赦せているのか？という問題に、彼は摩り替えています。自分の努力によって、イエス様の命令を守ることがどこまでできるか？と推し量っているのです。けれども、イエス様は神の命令に従うことは、自分の頑張りではないことをはっきりと教えられます。「七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十度するまでと言います。(22 節)」そんなこと、初めからできないのです。大事なものは、神の前における態度であり、心の状態のことです。へりくだることです。

4B 恵みから離れた報酬 マタイ 19 章 27-30 節

このような「自分がこれまで行なってきた。だから評価してもらいたい。」という思いは、さらに強くなっていきます。マタイ 19 章 27-30 節に行くと、ペテロが、「ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。私たちには何かいただけるのでしょうか。(27 節)」とイエス様に訴えています。イエス様は、確かに報いが将来あることを約束しておられます。しかし、「先の者があとになり、あとの者が先になることが多いのです。(30 節)」と言われました。それで、五時からの労務者の喩えを話されました。朝から働いている者にも一デナリ、五時から働いてたった一時間しか働いていなかった者たちも、一デナリです。それで朝から働いていた者が不平を鳴らしましたが、主人は、「私が気がいいので、あなたの目にはねたましく思われるのですか。(15 節)」と言っています。主が恵まれていることを忘れていました。神に恵みを受けていることを知れば、神に仕えることは喜びであり、何かをもらうためのものではないことに気づくはずで

5B 競争 マタイ 20 章 20-21 節

そして、神の国ではなく、人中心の国にしまっている動きは、彼らの間の競争の中にも表れます。マタイ 20 章 20-21 節に、なんと弟子の母親が出てきて、ヨハネとヤコブがイエス様の座の右と左に座らせてほしいと願い出るので、つまり、自分でなければ、他の人を使ってイエス様に影響を与えようとしています。教会の中で、競争が起こっています。

6B 律法主義的な態度 マタイ 26 章 6-13 節

そして、この緊張状態はエルサレムにイエス様が入城された後にも続きます。イエス様が死に渡される二日前、ひとりの女が高価な香油をイエス様の頭に注ぎました。マタイ 26 章 6-13 節に出て来ます。その時に、弟子たちはどのような態度を取ったのでしょうか？憤慨しており、「何のために、こんなむだなことをするのか。この香油なら、高く売れて、貧乏な人たちに施しができたのに。(9 節)」と言いました。確かに、貧しい者たちに施しをすべきであることは、神の教えとしてあります。けれども、イエス様はこの女の行為を快く受け入れられました。ご自分の埋葬の準備をしているのだ、そして福音が伝えられるところには、彼女のことも記念となるのだと言われました。

大事なのは、神の律法を振りかざさないことです。イエス様への心がもっと大事なのです。そして、彼らは、もっと悪いことが自分たちの間にあることを知りませんでした。財務係のイスカリオテのユダが、お金をコソ泥していたのです。律法主義に陥ると、本当の悪いことは置き去りにされているのです。牧者チャックが言いましたね、「間違っただけを行なっても、心が正しければ、後で正されても変えることができる。けれども、間違っただけで正しいことをしても、間違いを指摘されてもそれを正すことは難しい。」と。聖書を振りかざして、これは間違っている！と口角に泡をためるのではなく、イエス様に対する心が守られることを求めるのです。

7B 自信 マタイ 26 章 31-35 節

そして、イエス様が過越の食事を弟子たちと共にされて、イスカリオテのユダもいなくなり、弟子たちに、あなたがたはつまずくと語られ、彼らはそれを否定しました。ペテロは言いました。26 章 33 節と 35 節ですが、「たとい全部の者があなたのゆえにつまずいても、私は決してつまずきません。」「たとい、ごいっしょに死ななければならぬとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません。」であります。ペテロは、他の人たちよりも自分の献身は本物だとして、他の人たちと比べていました。また、死ななければいけないとしても、イエス様を知らないなどとは決して申しませんと、自分の意欲を強調しました。自分の肉の意欲に頼ることは、イエス様について行く時には致命的です。

彼は純粋だったと思います。しかし純粋に間違っていました。弟子として生きる時に、弟子たちの間で起こる多くの間違いは、決して不真面目だったからではないのです。むしろ、真面目であったからとも言えるでしょう。純粋で真面目だったので、御霊の支配ではなく、肉の力のほうに頼って

しまったのです。

3A イエス様の執り成し

ここで慰めは、イエス様がこのことを全て知っておられたということです。初めのルカ 22 章 32 節に戻ります。「しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」イエス様は、私たちが信仰から離れないよう、執り成しをしてくださっています。ですから、そこに神の憐れみがあります。その憐れみの中で、立ち直り、兄弟たちを力付けていたペテロの姿があります。私たちの教会の初代指導者であったペテロが、サタンによってその信仰のふるいがかけられた人であったのです。私たちは自分の肉の弱さを身にまとっているからこそ、神は私たちを選び、そして他の人々を励ますように召されています。